

幕末明治の写真師列伝 第二十九回 下岡蓮杖 その二十八

蓮杖についてはまだまだ語るエピソードもある。

「写真新報」の記者で浅沼商会に関係した原田種道(号栗園)は、晩年 89 歳の時の明治 43 年 11 月に蓮杖に会って直接話を聞いているが、蓮杖は原田に自分の経歴談を話しするものも山口才一郎のまとめた『写真事歴』(佐藤鉄弥 編・山口才一郎 記「写真事歴」(写真新報発行所、明治 27 年(1894 年)7 月))を渡し、原田(栗園)はそれを元に後に雑誌『写真新報 第百四十八号』(写真新報社、明治 44 年(1911 年)1 月)で評伝「本邦写真家列伝」の「下岡蓮杖翁」の記事として発表している。

この原田とは別に晩年の蓮杖に会った人物としては他に添田達嶺がいる。それは明治 44 年の末か明治 45 年(大正元年)の 1 月か 2 月頃に添田達嶺が木内半古から下岡蓮杖の人となり聞き、この木内半古の勧めで下谷入谷町の六世尾形乾山(浦野乾哉)の家を訪ねたところ、この六世尾形乾山(浦野乾哉)の妻が下岡蓮杖の娘・よしであったため、この伝手で浅草公園五区の蓮杖の住居を訪ねたことがきっかけで、その後も添田達嶺は蓮杖の家をたびたび訪ねていろいろな話を蓮杖から直接聞いている。

添田達嶺は後にこの時の話を、雑誌「芸術 第 6 巻 第 25 号」(大日本芸術協会、1928 年 10 月)の添田達嶺「下岡蓮杖翁の事ども(上)」と、雑誌「芸術 第 6 巻 第 26 号」(大日本芸術協会、1928 年 10 月)の添田達嶺「下岡蓮杖翁の事ども(下)」の記事として二回に分けて発表し、さらに雑誌「塔影 第 10 巻 第 8 号」(塔影社、1934 年 8 月)の添田達嶺「我が国写真術の開祖 下岡蓮杖翁(畫人風土記 伊豆の巻(下))」という記事にしている。蓮杖が添田に語ったエピソードのうちいくつかを紹介すれば、蓮杖は幼い頃より速く歩くことが道楽で、足自慢に飛脚の真似をして近所の人用の足を足していたという。二日に 44 里を歩いて下田から沼津まで行くこともできたと自慢している。また、面白い話としては、蓮杖は自身の嗜好についても以下のように添田に話をしている。「私の嗜好からいふと、鹽の辛い物や、熱い食物は大嫌ひであった。そして大好きなのは脂気の強い食物であった。酒は殆んど生れてから一滴も口にすることが無い。入浴は好きであったが、熱い湯に入ることは嫌ひであった。煙草は若い時分大いにやつたが、或時黒船に行くと和蘭の医者が居て、頻りに喫煙の悪いことを説いたので、私は断然其医者の目前で、煙草入れと煙管筒を打ち砕いて海中に捨てて了つた。それ以来私は一切煙草といふ物を口にすることはなかつた。」「私は今では別に早起きもしないで寝たい丈睡る。食物も別に贅沢はしないが、脂気の強いものは大好きである。それから私は毎朝顔を洗ふ時、冷水で鼻を冷やす。元来私は脳が悪くつて、ともすると逆上せて困るが、さういふ場合に鼻を水で冷やすとケロリ快くなる。また朝飯には如何なる朝でも大根おろしを食べない事はない。大根おろしは溜飲に非常に効能がある。鼻を冷やすと大根おろしを食べることは最早十五年間も続けて居る。」他にも蓮杖は添田にいろいろなことを話しているが、このくらいにして筆をおく。

以前に、「蓮杖の最初の弟子は横山松三郎だが、次に親族の臼井重蔵(後の臼井秀三郎)、桜田安太郎で、下田の船田万太夫、初代鈴木真一、岡本圭三(後の二代目・鈴木真一)、江崎礼二、*滝本平三郎、*四身清七、*桜井初太郎、*平井玄章、*西山礼助などがそうであった。

(*印の 5 人については詳細不明)」と書いたが、その後、少し判ったことがあるので、それについてもここで補足

しておきたい。

横山松三郎や親族の臼井重蔵(後の臼井秀三郎)、初代鈴木真一、岡本圭三(後の二代目・鈴木真一)、江崎礼二については有名な写真師たちなので、特にここでは述べないが、臼井重蔵(後の臼井秀三郎)の独立開業時期については、明治 14 年の『横浜商人録』に、「太田町 臼井秀三郎」とあることや、日本カメラ博物館所蔵の明治 2 年 6 月 17 日撮影の、徳川家達の肖像写真の写真台紙裏側に「横浜 臼井蓮節」の印章があることから、明治 2 年以前にはすでに独立開業していただろうと推察されていたが、戊辰戦争を幕府側で戦った旧幕臣の木村熊二の、「慶応四(一八六八)年五月にもなると、江戸にうつった戦場で「弾丸雨降の場に奔走」した。蔵前にある幕府貯蔵米を彰義隊にとどけようと広小路まできたものの、上野の山には入れない。官軍による苛酷な捜査をのがれ、家族と離れて静岡に向けて江戸を脱出している。官軍の臨検を受けると妻子の写真を見せ、「下岡蓮杖の弟子・蓮節である」と偽って難を逃れた。」(東京青年会会員・木村熊二が編集発行した『青年会演説集』第一号の巻頭序文の一節)などから、慶応 4 年当時に、臼井秀三郎はすでに臼井蓮節として独立開業していたことがこのことから判る。

桜田安太郎は、『写真新報』第 155 号に掲載された栗園の「本邦写真家列伝(其七)鈴木真氏(初代真一)」の項に、「時に翁(*蓮杖のこと)の長兄櫻田安太郎氏を始めとして、親戚縁者の同居するもの二三あり」と書かれていたことや、後に蓮杖の馬車道の写真館を継承していることから、当初は蓮杖の本家桜田家の人と思われていた。しかし、この人は元は横浜の久保山で「からす茶屋」という茶屋をやっていた人で、この人の妻が中島くみという人だった。中島くみの兄にあたるのが、蓮杖の養子になった下岡太郎次郎(太郎次郎は中島家、中島長次郎の四男)と中島嘉助(太郎次郎の弟)である。この中島嘉助の息子が中島一郎で、中島一郎は蓮杖の娘・ひさの最初の結婚相手であったが、ひさに子が出来なかったため、七年後に離婚している。(後にひさは岩田周作と再婚)つまり、蓮杖と中島家はこういう関係で親族であった。このことは、岩田ひさ、尾形奈美の『蓮杖 ききがき』を丹念に読むと書かれていた。桜田と名乗ったのは、桜田本家を継いだ桜田幸吉、ハナに子供がいなかったことからであろうか？

下田の船田万太夫は、明治 6 年に蓮杖から写真術を学び、翌明治 7 年に下田で営業写真館兼旅館を開業していた。

滝本平三郎は、やはり明治 6 年に横浜の蓮杖の門下となり、明治 16 年、芝琴平町に滝本写真館を開いた。明治 39 年 11 月に蓮杖より蓮香の号を授与されている。明治 43 年逝去。二男・寿郎が業を継いだが大正 9 年頃に滝本写真館は廃業したようだ。

蓮杖が晩年住んだ浅草公園五区の自宅すぐそばに開業していた勅使河原写真館は、勅使河原金一郎という蓮杖の門下の写真師で、後に浅草写真師会会長、東京写真商業組合理事長代理となり、4 回区会議員に当選している。昭和 15 年 1 月 14 日逝去。享年 56 歳であった。また、蓮杖の子息、下岡喜代松がこの勅使河原写真館の写真技師として勤めていたこともあった。

(森重和雄)